

高知県 南国市

平成9年度 高知空港発掘調査

# 田村遺跡群

現地説明会資料



1998年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

## 田村遺跡群発掘調査

### 1. 調査の目的

高知空港拡張整備事業に伴い、拡張計画地内に所在する田村遺跡群について、工事により影響を受ける部分における発掘調査を実施します。発掘調査は現地調査と遺構・遺物の整理作業を行い、報告書等を刊行することにより遺跡の記録保存を目的としています。

田村遺跡群の発掘調査は平成8年度から開始され、平成9年度は2年目の発掘調査となっています。

### 2. 田村遺跡群の概要

田村遺跡群は、前回（昭和55～58年度）の高知空港拡張整備事業に伴い発掘調査が行われています。前回の調査以前にも、西見当遺跡などの弥生時代の遺跡の調査が行われており、高知平野における弥生時代を代表する遺跡として知られていました。また、空港の北に隣接して、室町時代の土佐国守護代である細川氏の居館とされる田村城館跡（南国市指定史跡）も所在しており、高知平野南部の遺跡の中心地帯です。

遺跡の範囲は、前回の拡張範囲外にも広がっており、極めて広範囲の複合遺跡です。遺跡の立地は物部川の自然堤防上であり、物部川の氾濫にも余り影響は受けることなく、現在まで残された貴重な文化遺産です。

前回の発掘調査では、縄文時代後期、弥生時代前期～後期、古墳時代、平安時代、室町時代、戦国時代、以降現代に至る各時代の遺構・遺物が検出されています。中でも弥生時代と中世の2時期の遺構・遺物が最も多く、田村遺跡群の中心となる時代です。

縄文時代では、磨消縄文や沈線文などを持つ土器片とともに、多量の打製石斧が出土しています。弥生時代では、前期初頭の集落跡と前期の小区画水田跡（足跡も発見）、中期末から後期前半の集落跡が発見され、全国的にも注目されました。古代では、平安時代の整然とした方向と配置を示した掘立柱建物跡が発見され、荘園（田村荘）との関連が考えられました。中世では溝に囲まれた屋敷跡（環濠屋敷跡）が発見され、母屋・納屋などの掘立柱建物跡や石組みの井戸なども検出されており、当時の生活の跡を知ることができました。また、遺物からすると時期的にも13・14・15世紀の3時期に分かれており、各時期による環濠屋敷の配置や田村城館後との関係を知ることができました。

今回の発掘調査では、平成8年度に約17,300㎡の調査が行われ、やはり縄文時代後期の土器と石器や弥生時代中期～後期の大集落跡、中世の溝に囲まれた屋敷跡などが発見されていますが、大半を占めるのは弥生時代の遺構、遺物でした。

次に前回と平成8年度調査で発見された弥生時代の遺構をまとめています。

#### 前回（昭和55～58年度）調査分

弥生時代前期初頭集落・・・堅穴住居跡	10棟（円形5棟・方形5棟）
掘立柱建物後	14棟
弥生時代前期・・・・・・・・・・堅穴住居跡	4棟
弥生時代中期・・・・・・・・・・堅穴住居跡	23棟
弥生時代後期・・・・・・・・・・堅穴住居跡	23棟
堅穴住居跡の合計・・・・・・・・・・	60棟

#### 平成8年度調査分

弥生時代中期～後期・・・・・・・・堅穴住居跡	68棟
掘立柱建物跡	9棟

### 3. 調査対象地

高知県南国市 田村（高知空港の西拡張計画地内）

### 4. 調査期間

平成9年5月7日～平成10年3月31日（予定）

（前期 平成9年5月7日～9月30日）

（後期 平成9年10月20日～平成10年3月31日）

### 5. 調査面積

約48,000㎡

### 6. 調査体制

委託者	運輸省 第三港湾建設局 高知港湾空港工事事務所
調査主体	高知県教育委員会
調査実施	財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

## 7. 調査方法

- (1) 今回の発掘調査範囲は、平成8年度に行われた試掘調査の結果により、空港拡張範囲の中で遺構・遺物の確認された東半分を調査対象地としました。本調査の対象地の中でも進入灯を中心とした範囲から北西部の地域が遺跡の中心部分と考えられ、昨年度の調査の結果からも弥生時代の集落の中心となっていることが確認されました。
- (2) 本調査は、試掘調査の結果と現地の状況により調査対象地を決定し、現状の1町四方の地割りを基準とした調査区名称を設定しました。今年度における調査区の名称は次のとおりです。  
(前期) A1・A2・B1・B2・B3・C1・E2・E3・E4・F2・J1・J2  
          K1・P1  
(後期) C2・C3・E3・H2・I1・J3・J4・L1・N1・O1・Q1
- (3) 各調査区ともに表土及び無遺物層は重機により掘削を行い、遺物包含層については人力により掘削を行い、遺構・遺物の検出を行いました。遺構の完掘後は航空写真測量により、遺構の全体測量を行っています。同時に各遺構・遺物については必要に応じて写真撮影や図面によって記録を残しています。
- (4) 現地発掘調査を実施するとともに、出土遺物の洗浄、注記、接合などの基礎的整理作業も同時に並行して行い、検出された遺構・遺物の概要について早期に確認する作業を実施しています。

## 8. 調査協力

高知県 交通対策課 空港整備事務所  
南国市教育委員会  
田村・下田村地区を中心とする地元の方々

## 9. 調査担当

調査第2班長 森田尚宏  
調査員 前田光雄 小島恵子 三橋麻里 山田和吉 吉成承三  
坂本憲昭 坂本裕一 小野由香 田坂京子 久家隆芳

## 10. 調査内容

今回の発掘調査の中で、各調査区の遺構の検出状況は以下の表のとおりです。

### 検出遺構

調査区	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝跡	ピット	自然流路	その他
A1			2	3	10		
A2			2	2	30		
B1			11	4	94	1	
B2			25		150		井戸1
B3	8		68	1	640		構列1
C1	3		195	10	600		環濠1
C2	4	2	29	8	22	1	
C3	5		20	4	160	1	
E2			65	2	100		環濠2
E3			8	12	36	5	環濠1
E4	21	6	51	15	280		
F2	6		20	3	400	2	
H2			60	13	300		水溜4
I1	4	5	20	3	100		
J1	11	3	10	4	100		
J2							擾乱遺構なし
J3	13	10	37		310		
J4	18	4	24	7	260		
K1	9	2	10		60		
L1	7	3		5	160		
N1	6	1	24	7	430		
O1	1	3	9	3	8	1	
P1	4	3	10		50		
Q1		1	2	1	100		
合計	120	43	642	94	4,100	11	

今回の調査では、上の表のように竪穴住居跡が120棟発見されました。最も検出数が多いのはE4区の21棟であり、次いでJ区では合計で42棟が検出されており、弥生時代中期～後期の集落は、E区とJ区を中心としてF区及びK区に広がっているようです。

## 出土遺物

調査区	遺物数 (コンテナケース)	主要な遺物
A 1	1	弥生土器・土師質土器・石鏃
A 2	3	弥生土器・土師質土器・石鏃・石斧・石包丁・紡錘車
B 1	127	弥生土器・石鏃・石斧・環状石斧・石包丁・ガラス玉・土鏃
B 2	4	弥生土器・石鏃
B 3	25	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・石鏃・砥石・有鉤銅釧・管玉・土鏃
C 1	163	弥生土器・磨製石鏃・石鏃・石剣転用石斧・石斧・石包丁・石鏃・石製紡錘車・紡錘車
C 2	21	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・砥石・紡錘車
C 3	330	弥生土器・磨製石鏃・石鏃・環状石斧・石包丁・石鏃・有溝石鏃・磨石(ベンガラ付着)・紡錘車
E 2	92	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・紡錘車
E 3	246	弥生土器・石鏃・石斧・環状石斧・石包丁・石鏃・石製有孔円盤・石剣・紡錘車・土鏃・土玉
E 4	50	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・ガラス玉・管玉・ミニチュア土器
F 2	25	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・土玉
H 2	11	土師質土器・備前・青磁・染付
I 1	30	弥生土器・石包丁
J 1	15	縄文土器・弥生土器・ガラス玉・鉄斧・釣針
J 2	0	攪乱・遺物なし
J 3	30	縄文土器・弥生土器・石鏃・石包丁・石鏃・ガラス玉・鉄斧
J 4	40	弥生土器・石鏃・石包丁・ガラス玉
K 1	65	弥生土器・石鏃・石包丁
L 1	56	弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・砥石
N 1	30	弥生土器・石斧・石包丁
O 1	9	弥生土器・石鏃・石包丁
P 1	10	弥生土器・石鏃・石包丁
Q 1	3	弥生土器
合計	1,376	

今回の発掘調査による遺物は、コンテナケース(プラスチックの遺物収納箱)に入れて1,376箱ほども出土しています。特にC3区とE3区の自然流路からは330箱と246箱の多量の遺物が出土しました。住居跡からは土器や石器以外にもガラス玉なども出土しており、B3区の土坑からは県内初出土の有鉤銅釧も出土しています。

## 11. 調査結果

各調査区の調査概要については、以下に順番に述べています。

### (1) A区

A1・2区は中世の守護代の館である、田村城館の南西角部にあたります。前回の調査では、A2区の西側の道路から外堀が確認されており、今回の調査でも堀の続き及び中世の城館に伴う施設の発見が期待されましたが、城館に伴うと考えられる遺構は確認できず、内堀と外堀の間の空間であったと考えられます。また、弥生時代の遺物も出土しているため、A2区で検出された南北方向の溝は弥生時代と考えられます。

### (2) B区

B1区では昨年度の調査で下層に河川堆積が確認されており、今回は自然流路の調査が行われました。自然流路は幅約15m、深さ約2mであり、北東から南西方向に伸びています。自然流路の中からは弥生時代中期～後期の土器（壺・甕・高坏）や石器（石斧・環状石斧・石包丁）が多量に出土しています。この自然流路を境として東側には堅穴住居跡などがほとんどなく、集落の東限を区切る大きな川であったことが分ります。

B2区はB1区の東側の調査区であり、A区とともに中世遺構の存在が期待されましたが、柱穴が少し検出されたのみでした。この調査区からは近世の墓坑が確認されており、この地域では畑、水田の畦畔に墓坑が営まれる例が多く、近世以降のこの調査区は屋敷地ではなく耕作地であったと考えられます。

B3区はB1区の西側にあたり、堅穴住居跡、土坑、溝跡などが検出されています。堅穴住居跡には壁際に壁溝が巡り、同心円状に拡張している住居跡もありました。中央部には炭化物・焼土が認められる中央ピットがあります。調査区の東部には削平された堅穴住居跡の中央ピットと考えられる円形のピットがあり、有鈎銅釧が出土しました。ピットの埋土は炭化物層・焼土層・暗灰褐色土の順に堆積しており、炭化物層と焼土層の間に有鈎銅釧がありました。共存する土器片などからみれば、弥生時代後期初頭のものと思われます。また調査区東部では、平成8年度にB1区で検出された中世の環濠の続きが検出されており、環濠はちょうど調査区のラインに並行して南に曲がり延びており、一辺が約50mの方形区画の堀であることが判明しました。

### (3) C区

C区は西見当遺跡を中心とする調査区であり、C1～3区の調査が行われました。C1区では弥生時代前期の環濠が検出されました。環濠は幅約2m、深さ約1mの断面U字形をしており、東西方向にはほぼ直線的に延びています。環濠の内側では堅穴住居跡は

発見されませんでした。環濠の深さなどからみると当時の地表面はかなり削平されていると考えられるので、住居跡もすでに削平されている可能性もあります。また環濠の内外には多数の土坑が発見されており、前期の弥生土器や磨製石鏃などが多数出土しています。C2区はB1区で検出された自然流路の東側にあたり、遺構数は少ない状態ですが、円形と方形の竪穴住居跡が検出されました。住居跡はその形態からみると弥生時代前期初頭の集落の住居跡と類似しており、前期の環濠集落以前に小規模な集落が存在していたのではないかと思います。C3区ではB1区に続く自然流路が検出されており、土器・石器など多量の遺物が出土しました。また流路が埋まった後に弥生時代中期を中心とした竪穴住居跡が掘られており、C1区でも同時期の竪穴住居跡が数棟検出されていますので、前期だけではなく中期以降にも集落が存在していたようです。

#### (4) E区

E区はC区の西側であり、E2・3・4区の調査が行われました。E2区ではC1区で調査が行われた環濠の続きが検出されるとともに、その外側にもう1条の環濠が新たに発見されました。この発見により西見当の前期環濠集落は2重の環濠を持つ集落であることが判明しました。外側の環濠(外濠)は幅約1.5m、深さ約1mでその断面形は鋭いV字形ですが、やはり上部が削平されているようです。内濠との間隔は約30mであり、ほぼ並行して巡っています。またC1区同様に内濠と外濠の間には多数の土坑が検出されています。E3区ではC1区、E2区から続く内濠の一部が検出されましたが、調査区の大半は全面的に自然流路となっています。自然流路は前期の環濠を切っており、出土する土器からみても弥生時代中期を中心とした時期の流路と考えられます。調査区の西側の流路は昨年度に調査されたE1区の流路に続くものであり、さらにこの流路からは枝分かれした溝が西方へ延びています。E4区はE区の西端部の調査区であり、カリヤ遺跡として過去に一部調査がされています。調査の結果、調査区全体に竪穴住居跡が検出されています。住居跡には4棟が重なり合ったものもあり、弥生時代中期末から後期初頭の集落の中心部にあたります。また竪穴住居跡には円形と方形のものがみられ、円形のは直径8～10mの大型のものと直径4～6mの小型のものがみられます。方形のものは一辺が3～4mのものがみられます。遺構からの出土遺物はやや少量ですが、2基溝状の土坑には多量に壺・甕・高杯が投げ込まれており、一括して廃棄されたものと考えられます。竪穴住居跡ではガラス玉が出土したものが2棟と焼失したと考えられる住居跡が1棟あり、住居跡の床面には炭化材や焼土が検出されています。



#### (5) F区

F2区は南端と北端共に大きな自然流路に挟まれた立地であり、弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡6棟と土坑、溝跡などの調査が行われました。住居跡は直径8m程もある円形のものが大部分であり、中には石鏃、磨製石斧、石庖丁などの石器が多く出土した住居跡もあります。南側の自然流路からはさらに小溝が分岐しており、水口らしき遺構も発見されています。

#### (6) H区

H2区は調査範囲の南東端部にあたります。東隣のH1区では昨年度の調査で縄文時代後期の土器や石器が出土していますし、また前回の調査では溝に囲まれた中世の屋敷跡が北側のコキカ内地区で確認されています。調査の結果、調査区の西側には縄文時代後期の遺物を含む黒色土がみられ、東側には弥生時代以降の流路と考えられる砂質土が堆積していました。この面からはコキカ内地区で確認された屋敷跡の溝に続くと考えられる溝や柱穴が検出できました。溝の一部は幅が広がり河原石の石積みを持つ、水溜状の施設と思われる遺構も発見されました。出土遺物には中世の備前焼きや中国製の磁器とともにふいごの羽口や鉄滓などもみられます。

#### (7) I区

I1区は調査範囲の北端であり、弥生時代中期の集落の北外れに相当すると考えられます。遺構の密集度は低いものの、長さ4～6mの舟底形の土坑の側には掘立柱建物跡が並んで建つ例が5例ほど発見されています。舟底形土坑と掘立柱建物跡が対になっており、こうした類例はあまり知られていません。集落からやや離れた場所で、このような遺構の組み合わせがどのような目的で作られたのかは不明ですが、工房跡や納屋のような機能を持った収蔵施設などであったのではないかと考えられます。また中央部には東西方向に直線的な溝跡が発見されており、水利施設ではないかと考えられます。

#### (8) J区

J1区では弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡11棟が発見されています。調査区の基盤層は礫層であり、現代の水田耕作土を取り除くとすぐに住居跡が検出されています。中央部分は遺構は少なく、南と北に遺構群は分かれています。住居跡は礫層を掘り抜いて作られているものが大部分ですが、南端の住居跡からはガラス玉や鉄斧が出土しており、さらに県内最古の鉄製の釣針が出土しました。またH区以外では初めて縄文時代後期の土器がまとめて出土しています。J3区でもJ1区同様弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡13棟と掘立柱建物跡も10棟が発見されました。住居跡か

らは土器や石器とガラス玉も出土しています。また縄文時代後期の土坑数基が確認されており、中には埋甕と考えられるものも発見されています。J 4区もやはりJ 1・3区の集落の広がり範囲内であり、堅穴住居跡棟と掘立柱建物跡棟、その他土坑や溝跡が発見されました。調査区全面には基盤の礫層がみられますが、北部と西部では黒色土が広がり、O 1区へ続く自然流路と溝跡が確認されています。住居跡の中にはガラス玉が出土するものがあり、J 区全体ではガラス玉を出土する住居跡が多くみられます。

#### (9) K区

K 1区では昨年度からの継続で調査が行われ、堅穴住居跡 9棟が確認されました。K 1区全体では 37棟の堅穴住居跡が存在しており、田村遺跡群の中でも最も住居跡が集中している調査区でした。住居跡は円形が中心ですが、円形以外にも方形のものが 3棟見つかっており、また重複した住居跡も 3例あり、住居跡間にも時期差があることが分ります。

#### (10) L区

L 1区は昨年度調査したK 2区の南側です。中央部には自然流路が調査区を斜めに横切る形で横断し、遺構はその北側に集中しています。遺構は弥生時代中期末から後期初頭の堅穴住居跡と土坑等が検出されており、K・F区を中心とする集落は中央部の自然流路によって南限を区切られた状態になっています。流路の北側には、流路に向かって開く幅 3～4 m のコの字型の大形の溝状土坑があり、大量に土器が投げ込まれていました。また自然流路の上面と南には数条の細い流路が並行して検出されています。流路の南側では黒色土が堆積した上面で中世の掘立柱建物跡も 1棟発見されています。

#### (11) N区

N 1区は I 1区の西に隣接する広い調査区です。調査区の面積からすれば遺構の分布密度はやや低いが、堅穴住居跡 6棟のほか土坑などが発見されています。中央部の東西方向の溝跡も西へと延びており、調査区の中央部にはピット群が検出され、南部には住居跡、溝状土坑、貯蔵穴などが確認されました。住居跡からの出土遺物はやや少量ですが、床面には炭化材がみられ、柱穴には焼けた柱が残されていました。また貯蔵穴からは完形の壺 1個体と炭化したドングリが出土しています。

#### (12) O区

O 1区は J 4区の西側の調査区です。調査区全体の土層は北からシルト層、礫層、黒色粘土層の帯状の堆積がみられ、調査区の中央部南には自然流路が検出されています。流路の北側には若干の高まりがあり、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構が検出されますが遺構数は少なく、集落のほぼ西限を示していると思われます。

### (13) P区

P1区はK区の西側の調査区であり、遺構の分布密度は低くなっています。全体的に礫層がみられ、4棟の竪穴住居跡と3棟の掘立柱建物跡が散在しています。調査区の北側では自然の落ち込みがみられ、北には自然流路が存在するのではないかと考えられます。P1区もO1区と同様に集落の西限となる調査区と考えられます。

### (14) Q区

Q1区は調査範囲の西南端部になります。調査区の北部から中央部にかけては土坑とピットが検出されていますが南半部では掘立柱建物跡1棟と溝跡のみであり、竪穴住居跡は発見されませんでした。この結果からみれば、やはり集落の西限と南限にあたるものと考えられます。

## 12. 調査成果

### (1) 縄文時代

J区では、縄文時代後期の土器や石器とともに土坑も発見されました。昨年度の調査では、調査範囲の南東端部のH区で縄文時代の遺構、遺物が検出されていましたが、今回の調査により、縄文時代の遺跡の広がりは北側にも広がっていることが判明しました。調査対象地内にはいくつかの遺構、遺物のブロックが存在していると推定され、これらのブロックからは住居跡が発見されませんので、短期的な生活の場として残されたものと考えられます。

### (2) 弥生時代

今回の調査の中心は弥生時代です。弥生時代の中でも前期の環濠集落の調査が特に注目されます。環濠自体は今までの調査により確認されており、その範囲についても想定されていましたが、実際に環濠集落の調査を行うことによって、現段階では部分的ですが、集落の全体像も姿を見せつつあります。

新たな発見としては、環濠が2重であることが判明しました。内濠はすでに確認されていたものですが、外濠は今回の調査でその存在が明らかにされました。内濠と外濠は約30mの間隔を持ってほぼ並行して巡らされており、南辺部は直線的ですが、内濠は東側では自然流路に開き終わっていますが、西側は緩やかなカーブを描きながら北方へと延びています。内濠の幅は約2mであり、検出長はC1・3区、E2・3区において部分的に約70mが検出され、断面形はU字形です。外濠はE2区で検出されており、西側では自然流路により切られています。外濠の幅は約1.5mで検出長は18mです。その断面形はV字形となっており、内濠に比べて防衛的機能が低いと考えられます。内

濠の内側には現在のところ竪穴住居跡は検出されていません。環濠や土坑の深さなどからみれば、かなりの削平を受けていると考えられますので、すでに環濠に伴う前期の住居跡も削平されている可能性もありますが、他の前期環濠集落の調査例でも住居跡が検出される例は少なく、来年度の調査結果を踏まえての検討が必要です。土坑は環濠の内側とさらに内濠と外濠の間にも検出されており、外濠の範囲を含めて集落に生活の場として機能していたと考えられます。土坑内からは多量の弥生前期土器とともに磨製石鏃や石剣転用の特異な石斧、石鎌などの弥生時代前期特有の遺物が出土しています。

弥生時代中期～後期の集落の範囲は、調査範囲全域にはほぼ広がっていますが、特にE・F・J・K区を中心としており、中でもE・F・K区において竪穴住居跡の集中がみられます。今回の調査で発見された竪穴住居跡は、合計120棟にもおよび、昨年度の68棟と前回調査分の60棟を加えると、現在のところ248棟の竪穴住居跡が確認されたことになります。さらに来年度の調査を考えますと最終的には400棟近くの住居跡が発見されるのではないかと思います。また各調査区では物部川の旧流路である自然流路が発見されており、特にB・C区やE区の流路は幅約10m、深さ約2～3mと大きく、これらの自然流路が弥生時代の集落の立地と深い関連性があったことが考えられます。また流路の中からは多量の土器や石器が出土しており、当時の生活をうかがうことが出来ます。

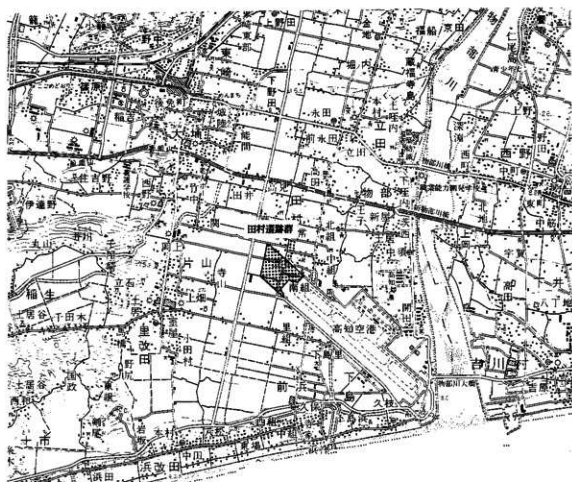
今回の調査で注目される遺物としては、B3区の土坑から出土した有鉤銅釧があります。銅釧とは銅製の腕輪ですが、その原型はゴホウラやイモガイなどの南海産の大形の巻き貝から作られた貝輪です。銅製腕輪に一個の鉤が付けられたもので、県内では初出土の遺物です。出土例としては佐賀県唐津市桜馬場遺跡の甕棺から26個の銅釧の出土などが知られています。その性格としては、やはり呪術的な要素を含んでいるものと考えられています。

#### ★ 今回の調査成果のポイント

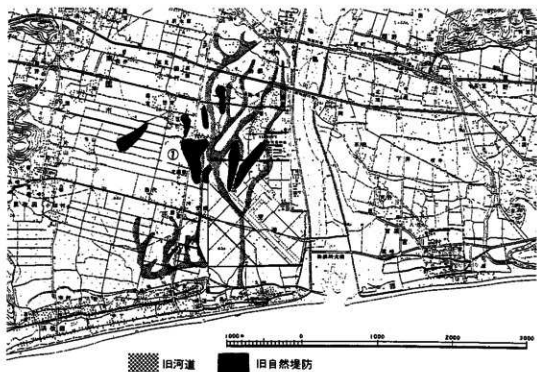
- ①縄文時代の遺跡の広がり確認。
- ②弥生時代前期の環濠の新たな確認と集落の内容。
- ③弥生時代中期から後期の集落の範囲確認とその全容解明に向けての調査。

竪穴住居跡230棟を検出 = 高知県最大の拠点集落

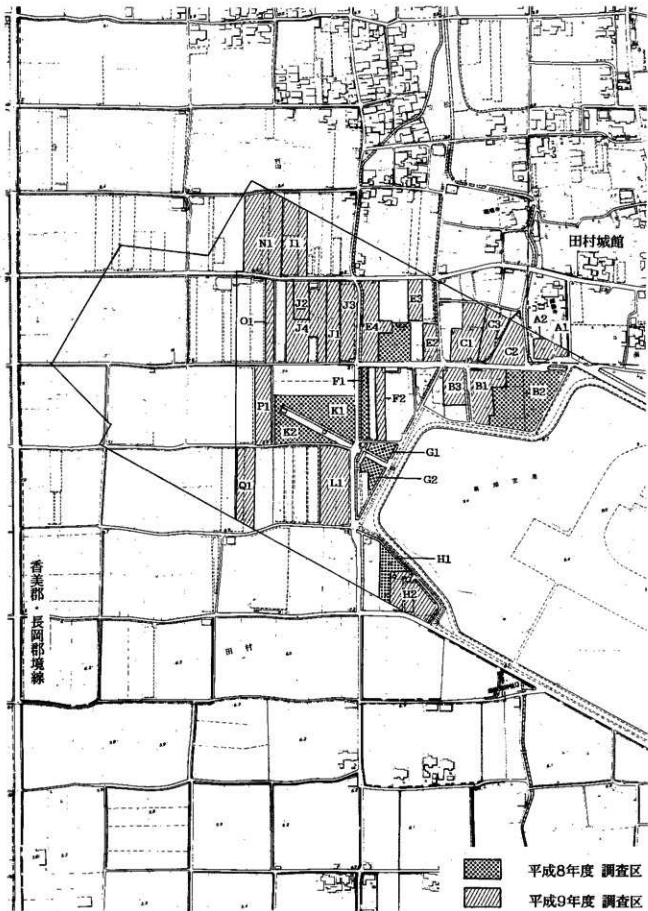
- ④県内初の有鉤銅釧の出土



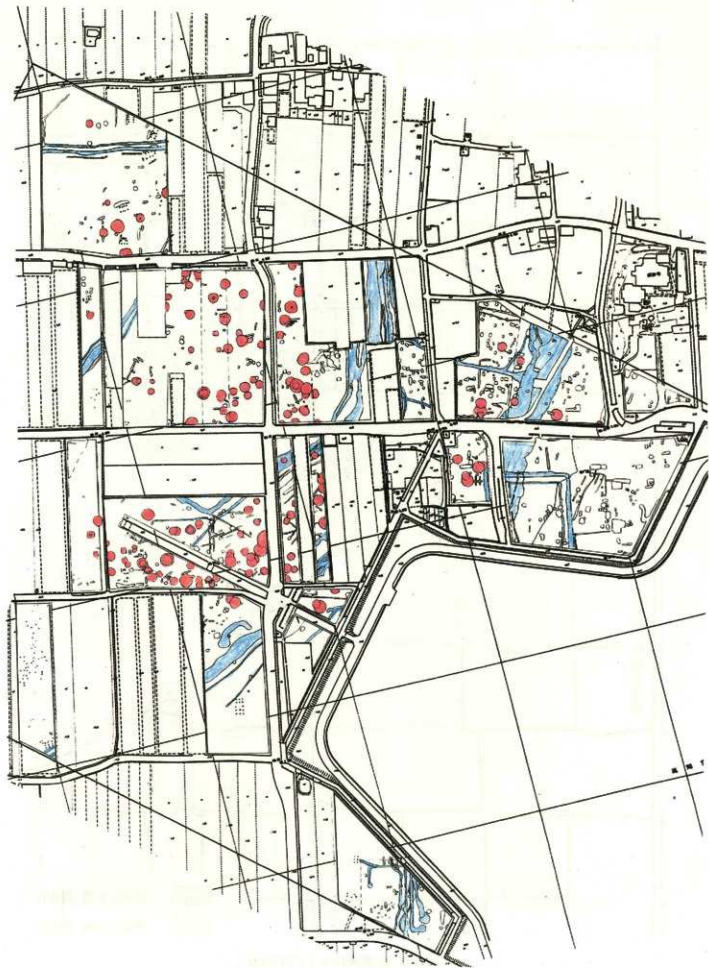
田村遺跡群 位置図(S=1/50,000)



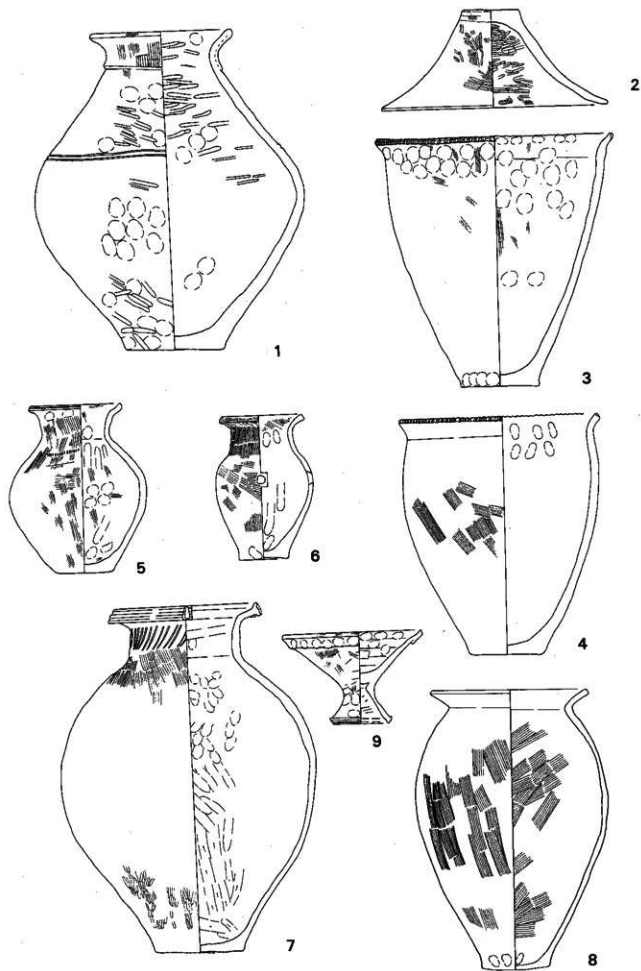
物部川 旧河道図



調査区 配置図 (s=1/5000)

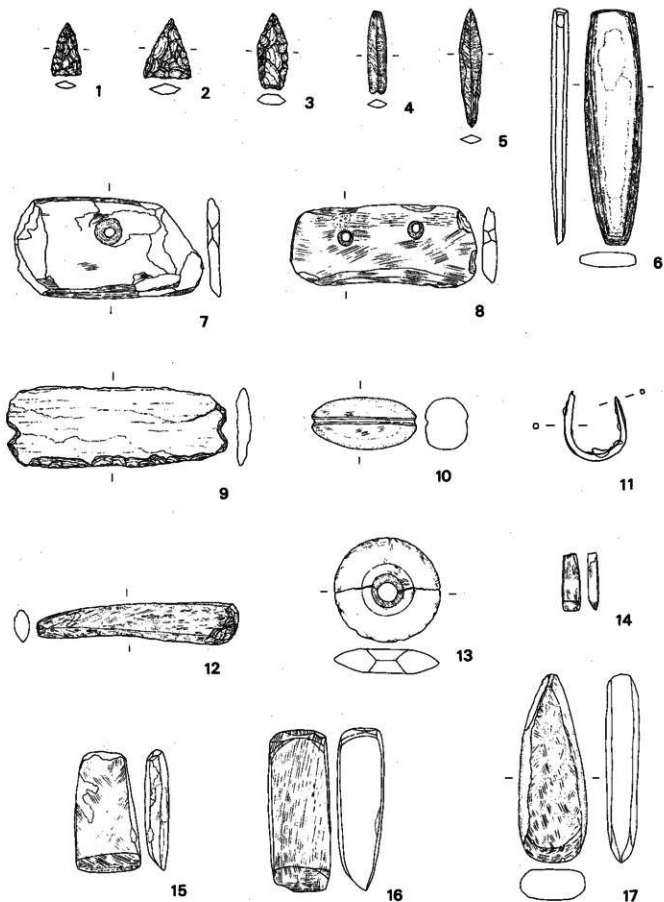


遺構配置図(S=1/2,500)

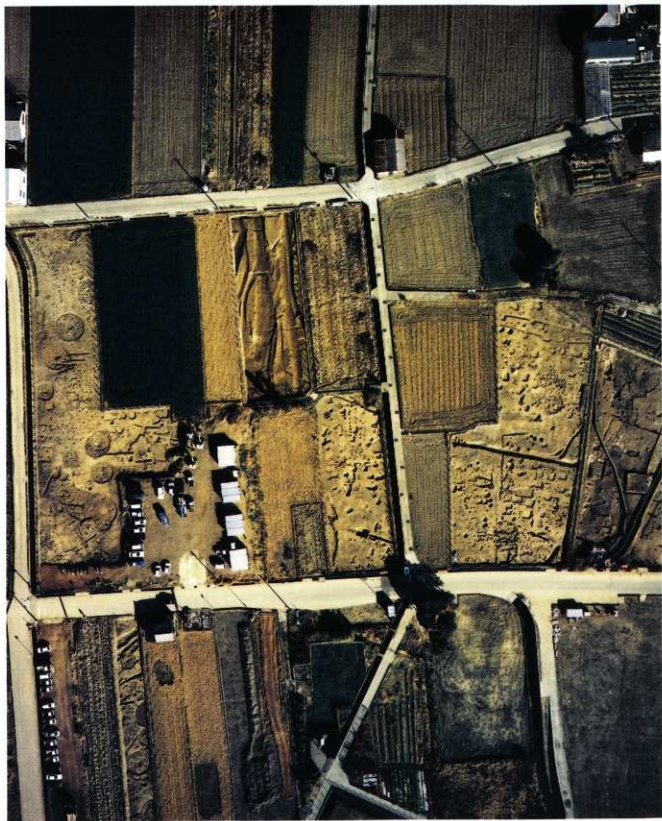


弥生土器 前期(1~4)・中期~後期(5~9)





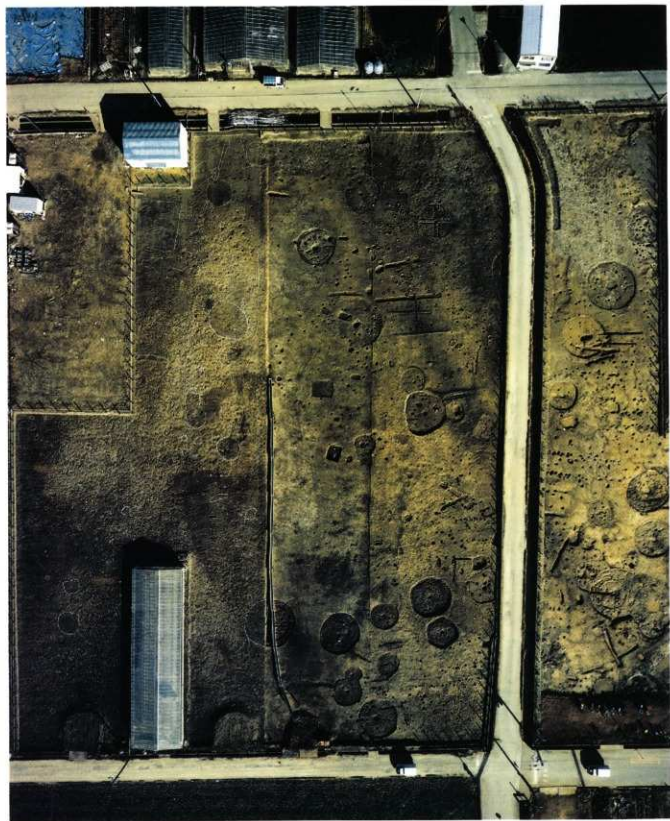
石器 打製石鏃(1~3)·磨製石鏃(4·5)·石斧(6)·磨製石包丁(7·8)·打製石包丁(9)  
有溝石錘(10)·鈎針(11)·石錘(12)·環狀石斧(13)·石斧(14~17)



C·E区 航空写真

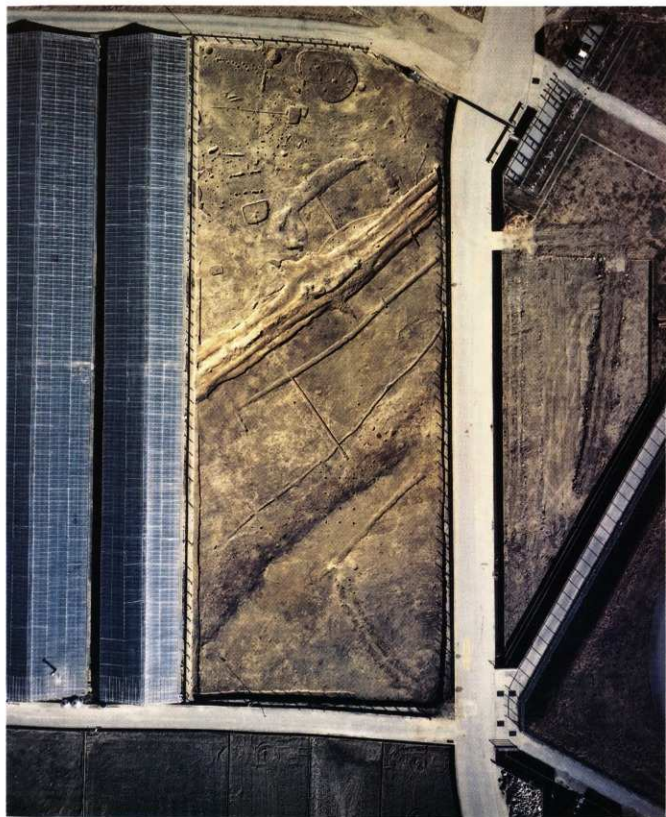


C1·2·3区 航空写真



J1·3·4区 航空写真





L1区 航空写真



弥生前期 外濠断面(E2区)



弥生中期～後期 竪穴住居跡(E4区)



弥生土器（前期）



弥生土器（中期～後期）

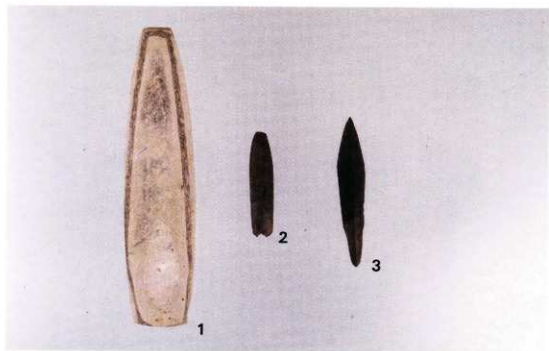


石器 石鎌(1)・石包丁(2~4)



石器 石斧(1~4)・環状石斧(5)





前期土坑出土石器 石斧(石劍軛用1)·磨製石鏃(2·3)



釣針



有溝石錘



有鉤銅鈎